

高橋仏焉／高橋亨の「春香伝」について

西岡健治

要旨 半井桃水訳「鶏林情話春香伝」以後、1920年までが日本における春香伝受容史「第一期」である。今回は、半井桃水に続き、高橋仏焉「春香伝の梗概」と高橋亨「春香伝」を取り上げる。「春香伝の梗概」は、筆者を「高橋仏焉」とするが、高橋亨の可能性が強い。京板23張本か、安城板20張本を大幅に縮小したものと考えられるが、原テキストの確定は困難である。特徴としては、筆者が顔を出したり、要約、省略が随所で大幅に行われている。その割には、コンパクトにまとめられた小品といえよう。高橋亨「春香伝」は、彼が語学力を駆使して採集した民間伝承である。その点では特異な位置を占める。原テキストは、京板系の要素も完板系の要素も持ち、それが逆に民間伝承であることを物語っている。特徴を挙げれば、第一は民間伝承であるということ、第二は非姦生系春香伝である完板84張本に近いということ、第三は作品独自の表現（展開）があるということ、第四は、独特な比喩表現を使って作品を興味深いものに行っていると言える。

キーワード 高橋仏焉 京板系 要約 省略 高橋亨 民間伝承 独自展開

はじめに

日本で最初に紹介された「春香伝」は、現在までのところ、1882年に「朝日新聞」に連載された半井桃水訳「鶏林情話春香伝」である。「朝日新聞」といえば、今では日本を代表する新聞社であるが、この時期はまだ大きくはなかった⁽¹⁾。そうだとすれば、この連載の影響力は大きくなかったと考えられる。

次に紹介されたのが、ここに紹介する1906年高橋仏焉による「春香伝の梗概」である。これは、当時、多くの読者を得ていた雑誌「太陽」に発表されただけに、影響も大きかったと考えられる。次に世に出たのが、高橋亨の「春香伝」

である。これは、彼の韓国語力を駆使して民話やことわざなどの民間伝承を収集した『朝鮮の物語集付俚諺』に収録されたものである。「物語集」最後から二番目の収録だが、1974年に金東旭教授によって紹介⁽²⁾されて以来、かなりの期間、日本に紹介された最初の文献だと思われてきた。今日、その位置は譲ることになったが、説話春香伝としての価値は依然としてあるように思う。

以下、半井桃水訳「鶏林情話春香伝」を除く、日本における春香伝受容史「第一期」の「春香伝」について見てみることにする。

1. [1906年] 高橋仏焉の「春香伝」紹介

半井桃水の次に春香伝を日本に紹介したのは、高橋仏焉である。『鶏林情話春香伝』が紹介されてから24年後の1906年6月、当時、多くの読者を得ていた月刊総合雑誌『太陽』⁽⁹⁾の「文芸」欄に、小説や戯曲や新体詩と並んで紹介された。タイトルは「韓国の文学」であるが、サブタイトルは「春香伝の梗概」となっており、主たる内容が「春香伝」であることがわかる。

「春香伝の梗概」は上下2段組で、それぞれがたて27字×よこ25行からなっている。作品は、段数で言えば8.5段あるので、字数は約5400字である。はじめに、紹介理由が1段ほど述べられ、次に「春香伝」が5ブロックに分けられ、(一)～(五)として紹介されている。

1. 筆者・高橋仏焉について

ところで、本文では筆者「高橋仏焉」となっているが、目次を見ると名前が「高橋仏骨」となっている。どちらの名前もその後二度と雑誌『太陽』には登場しないので、どちらが正しいかは不明である。いずれにしても、「仏焉」あるいは「仏骨」という名前は、当時流行⁽⁴⁾した江戸戯作者流のペンネームと考えられる。そうだとすれば、誰のペンネームであろうか。

推測される人物としては、「高橋」姓および、本文記載の「此の原本が漢訳でなく、漢(ママ)半島の一種の文字、即ち諺文に由って書かれて居る(中略)殊に破れた処もあり摺れた処もある位で、之れを遺憾なく譯するは我が力の遠く及ばざるを憾みとする」(下線部分は引用者、以下同じ)という内容に応ずる、「渡韓(1903年末—引用者注)後、延俊氏に漢文を介し韓語を学べり。半歳にして不自由なきにいた」⁽⁵⁾ったという経歴からして、高橋亨⁽⁶⁾ではないかと思わ

れるが、確たる証拠がないので断言はさける。因みに、高橋亨は、「韓国の文学 春香伝の梗概」が紹介された3年後の1909年に、雑誌『太陽』の発行元である博文館より『韓語文典』を刊行している⁽⁷⁾。

2. 「春香伝」紹介理由

高橋仏焉は、冒頭に「春香伝」を紹介する理由を掲げ、次のように述べている——

泰西文学東漸の勢は、大なる水渦を画いて、為に東洋文学の艶麗繊細なる意匠も、豪放雄大なる文字も、暁の星の如く其の影の次第に薄らぐの趨勢となつたが、稍再び光輝を放たんとして来た、(中略)要は政事上の意味に於て、朝鮮文学の研究は、吾が徒が当然なすべき義務ある者として、その趣味と特色とを広く紹介する事に力めたいのである、…

と。「政事上の意味」が何かについては、何も記されていないので詳細は不明である。しかし、この紹介の出る半年前の1905年12月、伊藤博文が初代韓国統監となっていることからすれば、およその見当はつけることができよう。

3. 作品の冒頭

作品の冒頭は次のようである——

「全羅道南原府使の息子に李鈴といふのがあった、府使といふと日本での県知事であるが、風習が変って居るから権勢共に偉大なものである、其の嫡男^{だけ}丈に家庭の教育も充分なるが上に頗る俊才^{しか}で而も眉目秀麗、時の婦女子をして見ぬ恋にあこがれしむる、

もし一疋を与えられるならば無前の光栄として喜ばるゝ程であった、如何に清秀にして如何に艶麗であったかゝ推定さるゝ。」

これによれば、南原府使の息子の名前が「李鈴」とあるので、京板系統であることが分る。しかし、京板本で「李鈴」および「関東八景」が登場するのは、30張と35張を除いた、安城板20、京板23、17、16張本が該当する。ところが、高橋弘焉は、作品の「梗概」を紹介することに主眼を置いたためであろう、大雑把な叙述が多くこれ以上絞り込むことが困難である。

例えば、京板系列の中で最も縮小された16張本の本文と比較しても、次のような長い記述

きれいなしろきかみ かべ きれいなあおきかみ
白綾花の襜に、青綾花を横に張り、
オンドルのゆかはあつみがあり てんじょうはわくどりされ からのあぶらがみ
角壮壮版、小欄天井、唐油紙の
クブトリ かわにはかけえ はしらにはやくよけ
壁下、似合いなり。書画付壁、立春書、
とうへき しんのしょしとう
万古才子の名作なり。東壁には、晋処士陶
えんめい ぼうたくのちようかん しゅうこう
淵明、彭沢令を拒絶し、秋江に舟を浮か
べ、清風明月に、櫓にまかせ、潯陽へと、
かぜそよぎつきあかき ろ
向う景、描かれおり、西壁には、さんごくあらそう
さま せいへき
三国風塵
せんらのよ かんのおうそん せきとぼ は
擾乱時、漢宗室劉玄德、赤兎馬を馳せ、
なんよう いおり いそぎ こうめい
南陽の草堂へ、風雲中、臥龍先生を訪わん
と、まごころもて行くさま 描かれおり、南壁
には、たいこうぼう せん いすい
姜太公、先の八十年、困窮し、渭水
ほとり カルサッカ まぶか
の辺にて、蘆笠、目深にかぶり、釣り糸な
き竿、水に垂れ、しゅうのぶんのう きま
周文王を待つ景、描かれ
おり、北壁には、六観大師の弟子、性真が、
はるかぜふくいしのうえ はちせんによ
春風石橋上にて、八仙女に出会い、六環杖
くもま きま
を白雲間に、投げ棄て、合掌拜礼する景、
描かれおり、……

が（以上は、あまりに長いので該当部分の4分

の1のみを引用)、「人を待つべき装飾の具備」と極めて短く要約されている。

また、これに続く、酒肴の紹介部分を、同じく16張本から引用すると――

チュニャンさげにさかな いんぎん
春香、酒饌を用意し、慇懃に勧めるに、さ
たまなる たべもの あまた パルモチョブシベッコウセイの
まざまなる飲食、丰盛なり。八角皿、玳瑁
ばん カンファさん みやま きじにく ひろくちうつわ
盤には、江華の鳥、深山の雉肉、広口鑪器
には、カルビの煮込み、小口鑪器には、
チエウクチヨ ソンビョン おいし
豚肉の炒め物、両耳とび出た松葉餅、美味
そうな ふかし餅、見栄えよき花煎の
サンスン ソンギ
油焼き、松肌餅の上飾りなり。鳳山の梨、
揚州の栗に、南陽の軟柿、報恩の棗、鳳
あわび くしやき いた ヤン
全鰓、牛の心臓の散炙、炒めた牛の胃袋に、
たけのこ な あお
竹筍、野菜、にが菜をあしらい、青葡萄、
くろ モル サル タレ ヨウ
黒葡萄、山葡萄、サルナシの実、柚子、
みかん ヲングム ギョクろ チヤメ スバク はしぼみ
柑子、林檎、石榴、まくわ瓜、西瓜、榛の
かや しろういキャンディうめがらキャンディ ごしよくキャンディ
実、榧の実、春糖、梅糖、五花糖、
チョジャン キョジャ しろみつ くろみつ あいまい あいまい
醋醬、辛子、生清、黒清を、合間、合間に
並べ置き、各種酒瓶、置きたるを見れば、
花の描かれし倭画瓶、黄の琉璃瓶、碧海
うなばら コブク がちよう
水上の亀型瓶、鶯鳥の瓶、李太白の葡萄酒、
とうえんめい
晋処士の菊花酒、麻姑仙女の千日酒、山中
処士の松葉酒に、一年酒、百花酒、梨甘膏、
甘紅露、竹瀝膏、桂糖酒、黄燒酒、過夏酒、
清酒、母酒、マッコリ
濁酒、すべてを合わせた混沌
酒を、鷓鴣酌、鸚鵡盃に、なみなみと注ぎ、
道令様に勧めるとき、

が、「酒肴の結構、容易に得べからざる物のみである」とこれも極めて短く要約されている。これでは、上記のように次々と物を挙げていく場面で微妙な変化を見せる板本の違いは明らかにしがたい。

4. 紹介作品の原テキスト

先に、「春香伝の梗概」は安城板20、京板23、17、16張本のいずれかがテキストであるとした。しかし、多種に渡るので強いて絞り込むとすれば、京板17、16張本を除いた、安城板20張本か、京板23張本の可能性がある。その理由を次に述べる。

「春香伝の梗概」の(五)には、科挙試験に合格し暗行御史となり乞食姿に扮してやってきた李鈴を、月梅が「狐狸」とまで非難する場面がある。そこを挙げれば、次のようである――

李鈴は蹉^さ跌^{てつ}に蹉^さ跌^{てつ}が重なって終に乞食^{こじき}となつて仕舞^{しま}つた、故に疾^とくにも死すべきであるが、一旦春香と百年の約^{やく}を結びしが為^{ため}生前^{せいぜん}一度^{たび}会^あふて別れ^{わか}れ^れな^な為^{ため}来^{きた}たのであると、強^{しい}て春香に会^あはん事^{こと}を求め^{もと}め、月梅^{げつばい}は半^{はん}ば怒^{いか}り半^{はん}ば恨^{うら}んで李鈴^{りよんにん}を罵^{のの}り、春香の長^{なが}き悲痛^{ひつう}は皆^{みな}此^この狐狸^{こり}(⁸)の仕^しわ^{わざ}ぎであると、御^ご史^しを狐^こ狸^りとまで罵^{のの}倒^{たう}した、

安城板20張本の関連部分を挙げれば、次のようである。その一は、李鈴（安城板では「李道令」）は、月梅に声を掛ける前に、春香に差し入れる粥を炊きながら嘆く月梅の声を聞いている――

庭^{にわ}から何^{なに}え^えば、春香^{はるか}が母^{はは}湯^ゆ 罐^かで粥^{かゆ}を炊^かきつ^つつ、嘆^{なげ}息^{いき}で言^いうことには、「わ^わが八^{やち}字^じ、奇^き薄^{はく}にして、早^{はや}喪^{そう}父^ふ母^ぼし、中^{ちゆう}年^{ねん}に喪^{そう} 父^ふし、末^{まつ}年^{ねん}に、独^{ひとり}娘^{むすめ}を頼^{たの}りたるに、怨^{かた}讐^きの李^り道^{だう}令^{れい}の^みみ、堅^{かた}く信^{しん}じて、か^かか^かる地^ぢ境^{きやう}にな^なりたれば、な^なんとした^{した}らよ^よいものか。ど^どうか神^{かみ}さま、お察^{さつ}し^しく^くだ^ださい。」と^と言^いえ^えば、(16A。下^{した}線^{せん}引^ひ用^{よう}者^者)

その二は、突然の訪問者が、実は待ちに待った李鈴（安城板では「李道令」）であることがわかったときの月梅の嘆きである。

春香が母、ようやくにして気づき、両の目を、右にこすり、左にこすって、仔細に見、びっくり仰天して、言うことには、「お顔^{おがほ}は、道^{ちう}令^{れい}ニムに分^{ちが}明^いが、衣^あ服^{ふく}は、鍾^{しゆう}楼^{ろう}の^{こじきのなかのこじき}上^さ 乞^こ 食^{じき}の模^さ様^まなり。い^いっ^いた^いい^いこ^これ^れは^はど^どう^うした^{した}こ^こか。す^すべ^べて^て木^も綿^{めん}糸^{いと}で^で継^つぎ^ぎは^はぎ^ぎした^{した}る^るは、怪^あ異^いなり。哀^あ号^{ごう}、哀^あ号^{ごう}、こ^この^の景^{けい}状^{じやう}、だ^だれ^れに^にか^か語^ごり、懸^つ鶉^{じゆう}百^{ひゃく}結^{けつ}と^とて、分^こ 数^{れい}け^れれば、い^いっ^いた^いい^いど^どう^うした^{した}こ^こか。碧^へ海^{かい}が桑^{そう}田^{でん}とな^なり、桑^{そう}田^{でん}が碧^へ海^{かい}とな^なるという^{いう}が、な^なに^にゆ^ゆえ、か^かくも^も変^か貌^{ぼう}り^りし^しや。哀^あ号^{ごう}、哀^あ号^{ごう}、道^り令^{れい}ニムと^と縁^ち故^ぎし^しゆ^ゆえ、わ^わが^が春^{はる}香^{かう}、獄^{ごく}中^{ちゆう}にて^て死^しぬ^ぬは^はめ^めとな^なりた^たれば、わ^われ^れら^ら母^ぼ女^{にょ}、昼^{ひる}夜^や願^{ねん}う^うは^は道^{だう}令^{れい}様^{さま}に^にして、待^{まち}つ^つは^は道^{だう}令^{れい}様^{さま}なり^りし^しが、い^いま、か^かか^かる^る形^{かたち}状^{じやう}に^にて^て来^きり^りた^たれば、あ^あ、い^いっ^いた^いい^いど^どう^うした^{した}ら^らよ^よい^いもの^{もの}か。」(16B)

これを京板16張本と比較してみると、その一に関する記述は全く16張本にはない。

したがって、「怨讐の李道令」なる語もない。その二に関しても、ただ「お顔^{おがほ}は、道^{ちう}令^{れい}様^{さま}に^に分^{ちが}明^いが、衣^あ服^{ふく}は、上^さ 乞^こ 食^{じき}なり。哀^あ号^{ごう}、こ^この^のさ^さま、誰^{たれ}にか^か言^いわ^わん。」と^とあ^ある^るだ^だけ^けで^であ^ある。こ^これ^れで^では、^ご御^ご史^しを^を狐^こ狸^りと^とま^まで^で罵^{のの}倒^{たう}した^{した}」と^とは^は表^{あらわ}現^{げん}し^し難^{がた}い^いよ^よう^うに^に思^{おも}わ^われる。そ^そう^うだ^だと^とす^すれば、本^{ほん}紹^{しょう}介^{かい}の^の原^{げん}テ^てキ^きス^すト^とは、安^{あん}城^{じやう}板^{ばん}20、京^{きやう}板^{ばん}23、17、16張^{しやう}本^{ぼん}か^から^ら17、16張^{しやう}本^{ぼん}(⁹)を^を除^ぞく、安^{あん}城^{じやう}板^{ばん}20張^{しやう}本^{ぼん}か^か、京^{きやう}板^{ばん}23張^{しやう}本^{ぼん}の^の可^か能^に性^{せい}が^があ^ある。

5. 「春香伝の梗概」の特徴

(1) 筆者が顔を出して説明している

テキストにはないが、日本人読者のために説明した部分がある。それらのいくつかを紹介すると、次のようである。

① 李鈴は春香と再会を約し、日が暮れるや屋敷を抜け出し春香の家に行くが、予想に反し母親月梅に断られる。その理由を紹介者・高橋弘焉が説明している――

「此の容易入れぬ事の実を云へば、自^{みづから}誘^{いざのよ}ふて入^いるゝ事になると高貴な道領(ママ)を誘惑^{ゆうわく}したと言ふ^{かど}廉^{れん}で重い刑に処せらるゝのである、故に無理に押し込んで来たかの様に月梅^{ろうくわい}の老怪^{らうかい}先の先^{おもん}まで慮^おばかつて居るからであった、」(春香伝の梗概 二)と。

② 李鈴の父親が都に栄転したのち、やって来たのは好色な新官であった。彼は、春香が「前府使の嫡男李鈴の為に守節して居る」と聞かされ、「頗る不満をいだ」く。そのキーワードとなるのが「守節^{しゅせつ}(¹⁰)」であるが、日本人には聞きなれない言葉であるので説明したものとと思われる――

「此の守節^{しゅせつ}と云ふ事は朝鮮の美風として行ふので、其夫^{そのつま}に別^{わか}るゝ時は紅粉^{かうふん}を廃^びし美衣^{びい}を撤^{てつ}し一室^{いしつ}に籠^{こも}って人と語^{かた}らず殆^せんど世^{せい}外の身^{ぐわい}となって日を送るのである、」(春香伝の梗概 三)と。

③ 李鈴は進士の試験に一番で合格し、望みによって「暗行御史」となった。しかし、この語も、日本人には知られない言葉であるので、次のように説明されている――

「之れは国中を視察して行賞刑罰を明かにする役である、」(春香伝の梗概 五)と。

(2) 筆者が改変した部分がある

何らかの理由で、テキストに使用された表現を筆者が改変した個所に、次のようなものがある――

① [何ヶ月→十年]

これは、春香が獄に捕らえられて李鈴が暗行御史となってやってくるまでの時間である。安城板20張本(12A)、京板17(12B)、16張本(12B)などでは、「何ヶ月(여러달)」となっているが、「春香伝の梗概」(四)と(五)では「十年」となっている。「何ヶ月」では余りに短いので、改変したと考えられる所である。

② [怨讐→狐狸]

安城板20張本「怨讐」(16A)が、「春香伝の梗概」(五)では「狐狸」となっている。これについては、既に論じたので省略する。

③ [装飾品、簪、絹織物を売り→髪^{ノリゲ}の毛^{トリヨンニム}を売り払ふても]

安城板20張本では「明日、函籠^{たんす}にある、装飾品^{ノリゲ}、前後^{まえうしろ}の簪^{びんこ}、絹織物を売り、道令様に、一揃^{トリヨンニム}いの衣服を作^つってあげてください。」(17B)となっているが、「春香伝の梗概」(五)では「此の髪^{ノリゲ}の毛^{トリヨンニム}を売り払ふても、世に指買^{さし}ふ人のあらば一本一本切^きって売^うっても、屹度^{いど}貴郎^{きらう}を世に在^ある人とおさせ申^まさでは置^おきませぬ」となっている。

(3) 要約して紹介した部分がある

これについては、すでに【作品の冒頭】で紹介したので省略する。

(4) 多くの省略部分がある

あまりに多いので、代表的なものを挙げるに

とどめる。

- ①初対面時に交わした「不忘记」がない。
- ②春香の家を初めて訪問する前の「千字文解」がない。
- ③初夜での余興である「文字打令」「人字打令」などがない。
- ④離別時に面鏡と玉指環を交わした場面がない。
- ⑤新官が南原に赴任するときの「路程記」がない。
- ⑥李鈴が暗行御史となって民情査察のため農夫たちに会う場面がない。
- ⑦府使の誕生宴に参加した御史が書き残す「暗行御史詩」の場面がない。

II. [1910年] 高橋亨の「春香伝」

高橋亨の「春香伝」は、「日韓併合」が行われた1910年の9月、ソウルの日韓書房⁽¹¹⁾より刊行された『朝鮮の物語集付俚諺』に収録されている。字数はおよそ8,300字で、それに350字ほどの解説が付いている。先に紹介した「春香伝の梗概」より1.6倍ほどの量があるので、ストーリー的には楽しめる分量である。解説文の冒頭に、「春香伝はこの国に於ける最も広く行わるゝ物語なり。浄瑠璃に、芝居に、若くは素人節に、春香伝を演ぜぬはなし。」とあって、この物語が当時たいへん好評を博していたことがわかる。

また、この物語は、1914(T3)年に、『朝鮮の俚諺集付物語』⁽¹²⁾として同じく日韓書房から改訂版が出されたときにも収録された。そして、1921年には、雑誌『朝鮮』⁽¹³⁾に2回(5、6月)に分けて転載されている。

1. 執筆者・高橋亨について

ここで、この物語の収集者であるとともに、戦前は京城帝国大学教授であり、戦後は天理大

学教授となって朝鮮学会を設立した高橋亨について述べておきたい。

高橋亨は、明治の末から戦前戦後を通じての朝鮮文化研究者で、1878年に新潟県に生まれ1967年に亡くなっている。著書として、『韓語文典』『朝鮮儒学大観』『李朝仏教』などがある。

戦後のことはよく知られているので、次に簡単に戦前の経歴を紹介しながら、韓国の物語や俚諺収集にいたる過程を見てみよう。

1898年、第四高等学校漢学科を卒業。この年、東京帝国大学文科大学に入学(21才)。

1902年、東京帝国大学文科大学漢文科を卒業。九州日報主筆となり、博多に赴く(25才)。

1903年、韓国政府の招聘を受け、官立中学校⁽¹⁴⁾備教師として渡韓(26才)。

1909年、博文館より『韓語文典』を刊行(32才)。本書の刊行は、「渡韓後6年にわたる研鑽と文法教授に従事したる体験の集大成」であるが、実は「渡韓後、延浚氏に漢文を介して韓語を学」⁽¹⁵⁾んだという。

1910年、日韓書房より『朝鮮の物語集付俚諺』を刊行(33才)。

これにより、次のようなことが明らかとなる。

高橋は、1903年、韓国政府の招聘を受け「九州日報」主筆をしていた博多から渡韓する。年譜⁽¹⁶⁾によれば、「幣原坦⁽¹⁷⁾氏の後任」とあるので、この人事はおそらく同じ東京帝国大学文科の卒業生という縁で、高橋が推薦されたものと思われる。こうして、高橋は1903年(M36)に渡韓し官立中学校に勤めるが、渡韓直後⁽¹⁸⁾から

「漢文を介して韓語を学」び、6年後の1909年には『韓語文典』を刊行するまでに到っている。

では、渡韓直後から、高橋亨はなぜ韓国語を学び始めたのだろうか。そのあたりの事情を、『韓語文典』の「自序」から伺うことができるように思う。高橋は、次のように「韓語」学習の必要性を譬えを使って述べている――

「日韓言語の交換に関しては敢て一言する所あらむとす。

近き過去迄は在韓日人中に一種の謬見行はれたりき。謂らく、韓人こそ日本語を学習するの必要あれ、日人に安ぞ韓語を学ぶの要あらむやと。飛んだ処に豊太閤⁽¹⁹⁾を擔ぎ出でて⁽²⁰⁾、外国語学習の煩勞を免れむとせり。され共、是は、感情が對話に働く力と、通訳者の能力の不十分と不道德とを閑却せる謬見なり。室を隔て、如何に大声に、如何に熱心に、如何に巧妙に話すとも、間の障戸を開いて、相対し、手相握りて話するの片言隻語にしかざらん。」

と。すなわち、外国に行って、通訳を介して相手とコミュニケーションするのは、壁を隔てて話をするようなもので、ほんとうに意思疎通するためにはその地の言葉を学ばねばならないと、実にわかりやすく解いている。これは、同時に、高橋亨自身の「韓語」学習動機だったのではあるまいか。

こうして、高橋は、「六春秋、未だ敢て韓語に熟せりと云はずと雖、略ぼ對話の自由を得たり」⁽²¹⁾と言えるまでになったという。この韓国語力によって収集したものを集成したのが、1910年刊行の『朝鮮の物語集付俚諺』である。次に、上記書に収録された「春香伝」の性格を

明らかにするため、『朝鮮の物語集付俚諺』を見ることにしたい。

2. 高橋亨著『朝鮮の物語集付俚諺』の性格について

本書の内容は、題名にあるように朝鮮の「物語」と「俚諺」を収集したものである。しかし、「付俚諺」とあるように中心は「物語」で、俚諺は付録として後ろに加えられている。それぞれの数を挙げておくと、物語は「瘡取」から始まり「毒婦」で終る28話で、俚諺は547個収集されている。

なお、本書は1914年に改訂版が出され、俚諺が547から倍以上の1298個収録された。その結果、1910年本では「物語」が多くページを占めたが、改訂版では「俚諺」が259ページとなり、「物語」の162ページより多くなっている。そのためか、改訂版では名前も『朝鮮の俚諺集付物語』と逆転させている。「物語」数と物語の内容には変化はない。ただし、改訂版であるためか、コンパクトな新書版になっている。

ところで、『朝鮮の物語集付俚諺』で忘れることの出来ないのが、「俚諺」に象徴されることの〈説話性〉についてである。つまり、ここで収集された「物語」や「俚諺」は、書物を調査して入手したものか、あるいは直接面接して口承により伝承されていたものを収集したのかという点である。もし、後者であるなら、それは貴重な当時の口承資料になるばかりか、「春香伝」に関する珍しい資料⁽²²⁾となる可能性がある。ここで、文献資料であるか、口承資料であるかについて明らかにしてみよう。

高橋は、1910年版「自序」において、次のように述べている――

「蓋し俚諺は社会的常識の結晶にしていつの世にか或人之を創稱して万人之に和し、遂に社会に風行し、其の或るものは今日猶用ひられて千万無量の意味を一句半解に寓(やど)し、物語は社会生活の精髓的縮図にして、或は極めて上代に、或は下りて中世に若くは近き過去の人の手に成り、善く社会の興味を刺激して口々(くちぐち)相承(あいう)けて長く伝はり来れるものなり。」⁽²³⁾ (注：読み仮名は引用者による)

と。「俚諺」が「俗間のことわざ。民間で言いならわされてきたことわざ。」⁽²⁴⁾であるとすれば、口承であることは間違いない。では、「物語」はどうであろうか。上記によれば、物語は「善く社会の興味を刺激して口々相承けて長く伝はり来れるもの」だとある。なかでも、「口々相承けて」とあることからすれば、この「物語」は他でもなく口碑伝承であることがわかる。また、本書刊行6年前に出版された『言海』⁽²⁵⁾によれば、「ものがたり 物語」とは、

- (一) 事ヲ語ルコト。ハナシ。談。説話。
- (二) 一ヲ記シタル草紙ノ類ノ称。「竹取一」「源氏一」

のことだという。これによれば、「朝鮮の物語集」の「物語」とは、(一)の「説話」のことであることがわかる。また、高橋は多くの注を付けているが、「淫僧食生豆四升」⁽²⁶⁾の後ろに、「こはこの国の口伝へをば有りの儘に綴りしなり。」とある。これによっても、高橋が「朝鮮の物語集」によって「朝鮮」の「物語(=説話)」を「集」めたことがわかるであろう。さらに言うなら、高橋の「予客歳以来如上の目的を以て朝鮮の物

語と俚諺とを蒐集し、積むで本書を成せり。」⁽²⁷⁾の「物語と俚諺とを蒐集」なる語によっても傍証できるし、冒頭の「今は昔、と或る田舎に…老爺ありけり。」⁽²⁸⁾、「今は昔、父には既に死別れたる二人兄弟ありけり。」⁽²⁹⁾、「今は昔、或田舎の両班に仕へたる片身の下男ありけり。」⁽³⁰⁾などの表現によっても、これらがいわゆる口承である〈昔話〉であることがよくわかるように思う。

3. 高橋亨「春香伝」の原テキスト

以上によって、『朝鮮の物語集付俚諺』が、「口々相承けて長く伝はり来れる」口承であることがわかった。したがって、これに収録された「春香伝」も口碑伝承であることになる。では、内容的に見て、高橋「春香伝」はどの系統に属するのであろうか。次に、この点について考えてみよう。

冒頭は、次のようである――

今は昔、全羅道南原郡守李氏の伴に李夢龍なる秀才ありけり。父に従ひて南原郡邑に在り。父の隣室を与へられて家庭教師に就きて日夜研学するに、才氣煥⁽³¹⁾発一を聞いて十を知り、屢々教師を驚かすにぞ、父も我家風を發揮するは夢龍なりとていとゞ望みを囑してけり。

最初に、男性主人公である「李夢龍」が登場する。多くは、「李道令」の形で登場するのだが、実名で最初から登場している。これはなかなか珍しい。ところで、上記冒頭の一文だけでは完板とも、京板とも言うことはできない。完板84張本を除いて、どちらも李道令が先に登場するからである。ただ、李道令が先行すること

によって、姦生系春香伝である可能性はあると言えよう。

次に、いくつかの場面を挙げて、系統について考えてみたい。次のような場合は、高橋亨「春香伝」と京板系統にあって完板系統にない（高橋＝京板≠完板）。それらの用例は次のようである。

① [(詩経) 七月篇]

李道令は春香に会って再会を約束する。その日、夜が来るのを待ちかね本を読むが、何をしてもし春香が思い出され、“会いたい、会いたい”と思わず大声を出してしまう。それを聞いた父親が、何かと下人に様子を調べに行かせる。すると、李道令はとんちを働かせて、困難な局面を打開する。この時のとんちが、京板と完板で違うのである。高橋と35張本を除く京板では「七月篇」であるが、84張本⁽³²⁾では「夢に周公を見ず」となっている。

② [待人曲]

李道令が春香に会いに家に行くと、春香は「室を奇麗に片付けて琴取出して静々と待人曲を弾じ居」た、と高橋にある。京板系の南原古詞と京板35は「待人難待人難」、京板30、23、安城板20は「待人難曲調」、京板17は「待人難」、京板16は「대연난」であるが京板17が「待人難」であるので誤刻と思われる。それに対して、完板系は、26張本には落丁でなく、29張本と33張本は「春眠曲」で、84張本にはこうした場面はない。したがって、高橋の「待人曲」は京板系統本に一致する。

では、京板系統本と言えるのであろうか。ところが、次のような場合には、前者とは反対に高橋亨「春香伝」と完板系統にあって京板系統

にはない（高橋＝完板≠京板）。それらを挙げれば次のようである。

① [男性主人公の名前「李夢龍」]

これは前に挙げたが、高橋亨では「李夢龍」となっている。この名前は完板84張本のみに出て来⁽³³⁾、他の完板33、29、26張本では「李道令」である。そして、京板には一切出てこない。京板では、南原古詞、京板35、30張本で「李道令」となり、23張本、安城板20、京板17、16張本では「李鈴」である。

② [春香、僕をして都の李道令に手紙を届けさせる]

新官の夜伽を拒絶した春香は、上官を侮辱したとして鞭打たれ瀕死の状態になる。そこで、春香は、最後の望みを託し都の李道令に、事情を記した手紙を下僕に届けさせる。が、その手紙を、偶然、通りかかった李御史が読むという場面がある。高橋では――

「夢龍は暗行御史を授かり、乞食児の風をなして一人とほとほと南原郡に來りたるに郡邑に近き途上の石に腰打ち掛けたる僕(しもべ)風の一男あり。よくよく見ればこれは我が先年春香の家に案内させし彼の僕なり。僕は姿の余り変れるに夢龍とは心付かで、何やらん独り語するを聴くに。あゝ哀なり春香、李夢龍と百年を契約せしとして今の郡守の言葉に従はず牢に送られて毎日毎日の鞭を受く。さるにても不信なる夢龍かな。此地を去りてより既に十数月、まだ一度の風の便りもせずとかや。春香終に苦みに堪へかねて此に一書を裁して我に託して都なる夢龍に送らしむ。され共京城は此処より雲山猶幾百重、何日か果して夢龍に届くるを得

む。(中略) 実に哀むべきは春香なり。不信なるは夢龍なり。』⁽³⁴⁾

となっている。この場面は完板84張本にしかなく、該当部分は次のようである。

「山のふもとの角を曲がるとき、ある下僕に出会いたり。杖を手にしてつぶやくを聞けば、『今日まで何日歩きしことか。千里の道、都まであと幾日かかる。趙子龍の江越えし青驄馬あれば、一日にして行き着こうものを。可哀そうなは春香なり。李の若様想うて、獄に捕われ、明日をも知れぬ命なり。性悪両班、李の若様は、別れてのち、一度の便りもなければ、これが両班の道理なるか。』御史、これを聞き、『これ、そちは何処に住むや。』『南原に住みやす。』『いずこに行くや。』『都にいやす。』『なに用にて行くや。』『春香の手紙もって、若様の宅に行きやす。』…』⁽³⁵⁾

春香の手紙は京板系の「南原古詞」と「京板35張本」の二つにあるが、これとは内容がまったく異なる。「南原古詞」では、かつての李道令とは知らぬ農夫にさんざん悪口を言われる中で、偶然、彼の息子が春香から李道令あての手紙を預かっているので見せてやると言う。この場面は、他の京板にはなく、完板にもない。

以上を総合すると、高橋「春香伝」は、京板固有の表現もあるが完板固有の表現もあって、どちらとはっきり言うことができない。逆に、そうであることが、この項の最初に明らかにし

たように、この作は「口々相承けて長く伝はり来れる」口承作品であることを物語っているように思う。

4. 高橋亨「春香伝」の特徴

このように、この作品の第一の特徴は民間伝承であるということにある。

第二は、先に、京板系であるか、完板系であるかどちらともはっきり言うことができないとしたが、傾向がないわけではない。それがこの作品の第二の特徴でもあるので、それを明らかにしながら他の特徴について言及する。それは、この作品が〈非妓生的傾向〉を持っていることである。さらに言えば、非常に完板84張本に近い。それらの例を挙げれば次のようである――

①李道令の下僕が春香を呼びに来たときの春香の返事

「妾は年未だ幼くして母の許に養はるる身なれば誰が召し玉ふとも一人若き男の側に往くべからず。家に還りて母君の許しを得てこそ仰せに従はぬ」⁽³⁶⁾

②しかしながら、春香は下僕に無理やり李道令のもとに連れていかれる。そこで「小さきこゑにて」春香が言った言葉が――

「此処は人目余り繁く、又我母の思はむことも恐ろしければ早く返し玉はれと願ふ。」

③李道令とのことを母に報告し、その夜の李道令の訪問についても許可を得ている

「春香は此日帰りて丘上の事共詳しく母に物語れば、月梅は得付くべき事と思ひつゝ何彼と支度共なし、春香にも湯浴みさせ善き衣着せて公子を待たしむ。春

香も既に二八青春の齢に達したる身の母の許しゝ人なれば待たずしもあらず。」

④「不忘记」⁽³⁷⁾なしに結婚を承諾

「夜も深更に及べば、宴を撤して洞房に入れるに、春香は公子妾と百年を契り玉ひて如何なることありとも他の女に心を動かずと誓ひ玉はずば、妾は公子に許しまるらすこと能はず。(中略)夢龍も堅く誓ひたり。此より毎夜此処に通ひて交情偏へに漆膠に似たり。」

第三の特徴は、京板や完板に見い出すことのできない、まったく新しい表現(展開)が加えられていることである。高橋の手による可能性もあるが、そうであるかどうかは、この作品が民間伝承であるだけに慎重を要するであろう。それらの例を挙げれば次のようである――

①李道令、春香との別れに際して明年の再会を約束する

「夢龍は出立の日事に託して中途より引き返し、邑外五里町迄送り来りし春香と馬を下りて手を握りて涙を流しつゝ我明年春三月桃の花夭々たる頃、必ず再び此に汝と会すべければ、信じて我を待て」⁽³⁸⁾と。

②李御史、春香の手紙により窮状を知り使いの者に手紙を託している

「夢龍は始めて春香の其後の様子を知り驚駭し、傍の民家に就きて筆紙を求めて之に返事を認めて僕に託して春香に届けしむ。」⁽³⁹⁾

③月梅は、やって来た李御史を破落戸(ごろつき)と勘違いする

「夢龍は猶も去らずかにかくと飯なく

ば酒、酒なくば銭給へといふにぞ、月梅はさては乞食にてはあらざりけり、此の頃春香の捕はれてより日となく夜となく近処の破落戸共来りて或は春香を救ひやるべければ銭数多出し玉へとか、或は我春香を救はんは春香を我妻に給ふべきやなど脅かすに、これも亦彼等の悪戯かと立ち上りて戸を開き其人を見るに」⁽⁴⁰⁾

④乞食となってやってきた李御史を見て、月梅が春香に次のように言う

「さればこそ我が汝によくよく言ひしものを。我家は代々妓生にして我も我母も祖母も誰一人守節したる人を聞かず。水は流るゝに任せて終に留まりて淵をなす処あり。」

第四の特徴は、他に見られない独特な比喻表現が用いられていることである。それぞれがたいへん面白い表現で、高橋の介入ではないかとも思うが、軽々しくは即断できない。

それらの例を挙げれば次のようである(下線は引用者)――

①下僕が、春香に、李の若様がお呼びだと叫ぶ声に対して

「僕に向ひて声も優しく、閻魔大王妾を召すか、劉玄德南陽の高夢を覚ますか、如何なればしかく急ぎ呼立つるか。」⁽⁴¹⁾

②上記春香の皮肉めいた言い方に対して、僕が反撃したことば

「僕はからからと打笑ひ、代々妓生の汝の家に一人男の側に往かれずとは、家鴨の児が水を恐ろしといふに同じ。」⁽⁴²⁾

③新官に夜伽を要求され、春香は頑として次のように答えている

「妾は既に李夢龍に百年契約をなしたれば、国王召し玉ふともこの操を渝(か)へんとは思はず。」

- ④上記のように春香に夜伽を拒絶され、新官が怒って言うことば
「妓生の女に守節とは婦人の鞆丸(ふぐり)よりも聞かぬ話なり。」

結論

日本で最初に紹介された「春香伝」は、1882年の半井桃水訳「鶏林情話春香伝」である。日本における春香伝受容史「第一期」の対象となるのは、「鶏林情話春香伝」を除き、1906年高橋仏焉による「春香伝の梗概」と1910年高橋亨の「春香伝」である。

まず、「春香伝の梗概」であるが、筆者は高橋亨の可能性が高い。紹介する理由は、やはり日本の朝鮮進出に伴う、その地の「趣味と特色」であった。大幅に縮小されたものであるが、原テキストは冒頭からも京板系と考えられる。特徴としては、筆者が顔を出したり、紙面の都合であろう、改変、要約、省略が随所に行われている。その割には、コンパクトにまとめられた小品になっている。

高橋亨「春香伝」は、彼が語学力を駆使して採集した民間伝承である。その意味では特異な位置を占める。原テキストは、京板系とも完板系とも言えず、それが逆に、民間伝承であることを物語っている。特徴の第一は民間伝承で、第二は非妓生系春香伝である完板84張本に近いことで、第三はこの作品独自の表現（展開）があり、第四として、独特な比喩比喩表現が用いられ作品を興味深いものになっている。

注

- (1) 上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観』筑摩書房、1996年11月、53頁。
- (2) 金東旭「韓国文学における『春香伝』の「春香伝の文献」『比較文学研究』第26号、1974年11月。
- (3) 1906年6月（第拾貳巻第八号、通巻211号）
- (4) 前号の第拾貳巻第七号「文芸時評」で、長谷川天溪が「(一) 江戸趣味の復活」を論じている。
- (5) 「高橋亨先生年譜略」『朝鮮学報』第十四輯、3頁。
- (6) 詳細な紹介は、②「高橋亨の春香伝」紹介時に譲る。
- (7) 『韓語文典』刊行の翌年、1910年に刊行した『朝鮮の物語集付俚諺』の出版社は「日韓書房」であるが、印刷所は「東京市小石川区久堅町一〇八番地 博文館印刷局」となっている。博文館と日韓書房は関係があるのであろうか？ 1914年に改訂版として出された『朝鮮の俚諺集付物語』も同じ印刷所である。
- (8) 「何食わぬ顔をして人をだましたり悪事を働いたりするものの意にも用いられる」（新明解国語辞典・第六版）とある。
- (9) 京板17張本と16張本は、一行の文字数を増やただけで内容的にはほぼ同一。
- (10) 守節とは「貞節を守ること」であるが、朝鮮時代、女性の徳目として非常に重要視された。
- (11) 前掲注(7)参照。また、日韓書房は、1907年『韓国丁未政変史』『京城案内記』、1908年『暗黒なる朝鮮』『伊藤公と韓国』、1909年『朝鮮漫画』、1910年『漢城の風雲と名士』『朝鮮最近外交史 大院君伝』『日韓古蹟』『京城と内地人』、1911年『朝鮮半島』、1912年『京仁

- 通覧』など、主に韓国に進出した日本人に供する案内書を出版している。
- (12) 『朝鮮の物語集〜』が、改定版では『朝鮮の俚諺集〜』と入れ替わっていることに注意。
- (13) 「発行所 朝鮮総督府」となっていて総督府の機関誌的な雑誌であるが、学術的な論文も多く掲載されている。
- (14) 「妻ゆう漢城病院に勤務し、李王家侍医を委嘱さる」（「高橋亨先生年譜略」朝鮮学報第48輯）からして、漢城（ソウル）の官立中学校勤務だったと考えられる。
- (15) 以上、「高橋亨先生年譜略」朝鮮学報第48輯。
- (16) 上掲注(15)参照。
- (17) 幣原坦（してはら・ひろし）1870－1953。明治から昭和にかけての官僚、教育家。東京帝国大学文科国史科卒業。後に東京高等師範教授、東京帝国大学文科大学教授、台北帝大総長などを歴任。著書に、『朝鮮教育論』『韓国政争史』『朝鮮史話』など。敗戦後首相をつとめた幣原喜重郎の兄。高橋亨より8才年長。
- (18) 年譜によれば、「『韓語文典』は、渡韓後六年に亘る研鑽と文法教授に従事したる体験の集大成なり」とあり、『韓語文典』は1909年の刊行である。そして、6年前は1903年であり、これは高橋亨の渡韓の年である。だとすれば、渡韓直後から韓国語を勉強し始めたことになる。
- (19) 豊臣秀吉の敬称。
- (20) 「自分勝手なことを言って」という程度の意か。
- (21) 高橋亨『韓語文典』博文館、1909年、「自序」3頁。
- (22) 春香伝の口承資料は少なく、研究には板本、筆写本が利用されることがほとんどである。韓国精神文化院『韓国口碑文学大系（韓国説話索引集）』（1989年）にも、「春香」の項目はない。口承研究としては、薛盛璟に『春香伝』辞説の形成研究（『韓国古小説研究』二友出版社、1983年所収）があるが、少ない。
- (23) 『朝鮮の物語集付俚諺』（1910年）「自序」3頁。
- (24) 『広辞苑』「俚諺」第二版補訂版、岩波書店、1979年。
- (25) 「ものがたり」の項、1904年、六合館。
- (26) 上掲注(23)、63頁。
- (27) 上掲注(23)、「自序」4頁。
- (28) 上掲注(23)、「瘤取」1頁。
- (29) 上掲注(23)、「解語亀」40頁。
- (30) 上掲注(23)、「片身奴」67頁。
- (31) 初出は「爛」であるが、1921年4月『朝鮮』誌に転載される時は「煥」に訂正された。
- (32) 完板26張本は落丁で不明、29張本と33張本にはこの場面なし。
- (33) 板本では完板84張本だけであるが、この影響を受けたと思われる李海朝の「獄中花」や「張子伯唱本」でも「李夢龍」である。
- (34) 上掲注(23)、192－193頁。
- (35) 完板84張本烈女春香守節歌、72B。
- (36) 上掲注(23)、185頁。
- (37) 京板系統のように、妓生春香伝では「不忘記」を書く場面がある。しかし、84張本のうに非妓生春香伝ではそうした場面はない。
- (38) 上掲注(23)、189頁。
- (39) 上掲注(23)、193－194頁。
- (40) 上掲注(23)、195－196頁。
- (41) 上掲注(23)、185頁。
- (42) 上掲注(23)、185頁。